



但馬水産技術センターだより



漁況情報 (G2224号)

令和4年8月1日

兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

2022年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報をお知らせします。

国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所と日本海沿岸各道府県水産関係機関が検討し、水産資源研究所がとりまとめた2022年8月～12月のスルメイカ漁況予報をお知らせいたします。

【今後の見通し(2022年8月～12月)】

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（右図参照）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

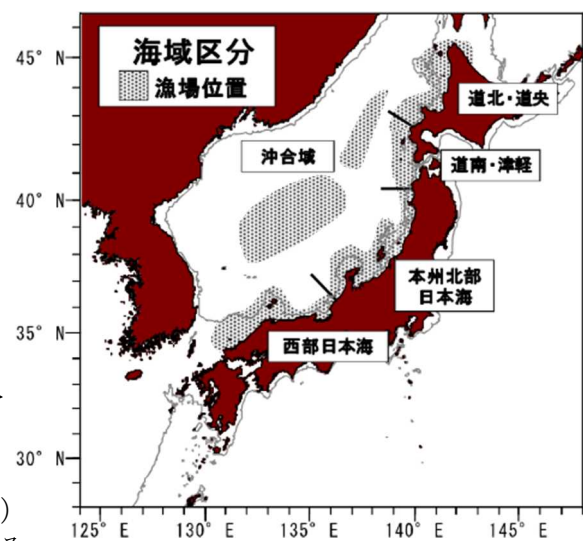
対象魚群：主に秋季発生系群、
後半は冬季発生系群も含む

1. 日本海全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
2. 西部日本海（福井県～長崎県、小型いか釣り）
 - (1) 来遊量・漁況：前年を下回り、近年平均並み。
 - (2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。
3. 沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域、いか釣り）
 - (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
 - (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

※「近年平均」は最近5か年（2017年～2021年）の平均、前年は2021年を示す。

詳細及び他海域の予報は、別添の予報文資料をご覧ください。

予報内容の詳細は、国立研究開発法人水産研究・教育機構のウェブサイト（プレスリリース：<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/index.html>）に掲載されています。なお、漁況予報は、水産庁の「我が国周辺水産資源調査・評価等推進委託事業」により、資源の合理的利用、漁業経営の安定及び操業の効率化を図り、資源の持続的利用に役立てることを目的として行われているものです。



お問い合わせ先：兵庫県但馬水産技術センター（担当：鈴木）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

E-mail：nouringc_tajima@pref.hyogo.lg.jp

HP：http://www.hyogo-suigi.jp/tajima/index.htm

2022年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。

(2) 漁場：漁場は形成されるが、近年と比べて散発的。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年を下回り、近年平均並。

(2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。

(2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2017年～2021年）の平均、前年は2021年を示す。

* 道北・道央海域は8月～9月を対象とする。

I 予報の説明

2022年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（2022年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および9月までの海況予報（2022年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、7月～8月と10月～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群も漁獲対象となる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は前年並で、8月～9月に当海域に来遊してくると考えられる道南・津軽の分布量も前年並であった。6月の漁獲量情報は無いが、調査情報から、8月～9月の来遊量は前年並に少なく、近年平均を下回ると予測される。なお、10月以降については冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では近年、6月～8月に漁獲量のピークがある。また、11月～12月には、夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象とした漁獲のピークができる場合があるが、近年はほとんど見られていない。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年並であった。本海域における6月の漁獲量情報は前年を下回るが、道南の漁獲量が未集計であることによる。また、予報期間の後半の来遊に関係する太平洋側の冬季発生系群の9月までの来遊は、津軽海峡～道南太平洋海域および常磐～三陸海域で前年並と予測されている。以上のことから、本予報期間の来遊量は前年並で近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、従来、5月～7月が漁期の中心であったが、近年、6月～7月が漁期の中心となっており、8月以降も漁場が形成される傾向にある。12月の漁場形成には、海況の影響が大きいと考えられる。

【今期の情報と予報の説明】 本海域においては5月～6月に漁場が形成され、漁獲量は前年を上回り、近年平均並であった。一方で、予報期間の後半の目安となる日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間当たりの漁獲尾数）は前年を下回っており、沖合からの来遊量は前年より少ないと予測される。以上のことから、近年では漁獲が少なかった前年並の来遊量で近年平均を下回ると予測される。なお、12月の漁況は沖合冷水の張り出しとの関係が大きく、現時点では来遊量を予測できない。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は10月～12月の南下群の来遊が少なく、漁場が形成されにくい。

【今期の情報と予報の説明】 本海域での6月の漁獲は前年を下回り、近年平均並であった。10月以降の来遊量の目安となる日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUEは前年を下回っており、沖合からの来遊量は前年より少ないと予測される。以上のことから、前年を下回り近年平均並と予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 沖合域では従来、6月～12月にかけて大和堆周辺海域に漁場が形成され、また水温の高い8月下旬～9月には北海道西沖にも漁場が形成されてきた。しかし、2000年代以降漁場が北偏化し、8月～11月は主に北海道西沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では6月～7月および11月～12月に漁場が形成される年が増加した。さらに2019年以降は、これまでの傾向と異なり、大和堆や北海道西沖で漁場が安定して形成されず、能

登半島周辺や佐渡沖が主漁場となる場合がある。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果による本海域の分布量は前年を下回り、また前年見られたような極めてCPUEが高い点も見られなかった。以上から、今期の本海域への来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。また北海道西沖の分布量は前年並に少なく、大和堆周辺海域も前年のような高密度の分布が見られなかったことから、沖合域は全域で漁場となりにくいと予測される。ただし、2021年は8月以降に大和堆周辺海域で調査範囲外からの来遊および日本EEZ外での漁場形成が見られた。また2019年以降、沖合域の漁場形成は不安定であることにも注意を要する。

II 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、日本海側の7道県および水産研究・教育機構による調査船でのいか釣り試験操業（6月中旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

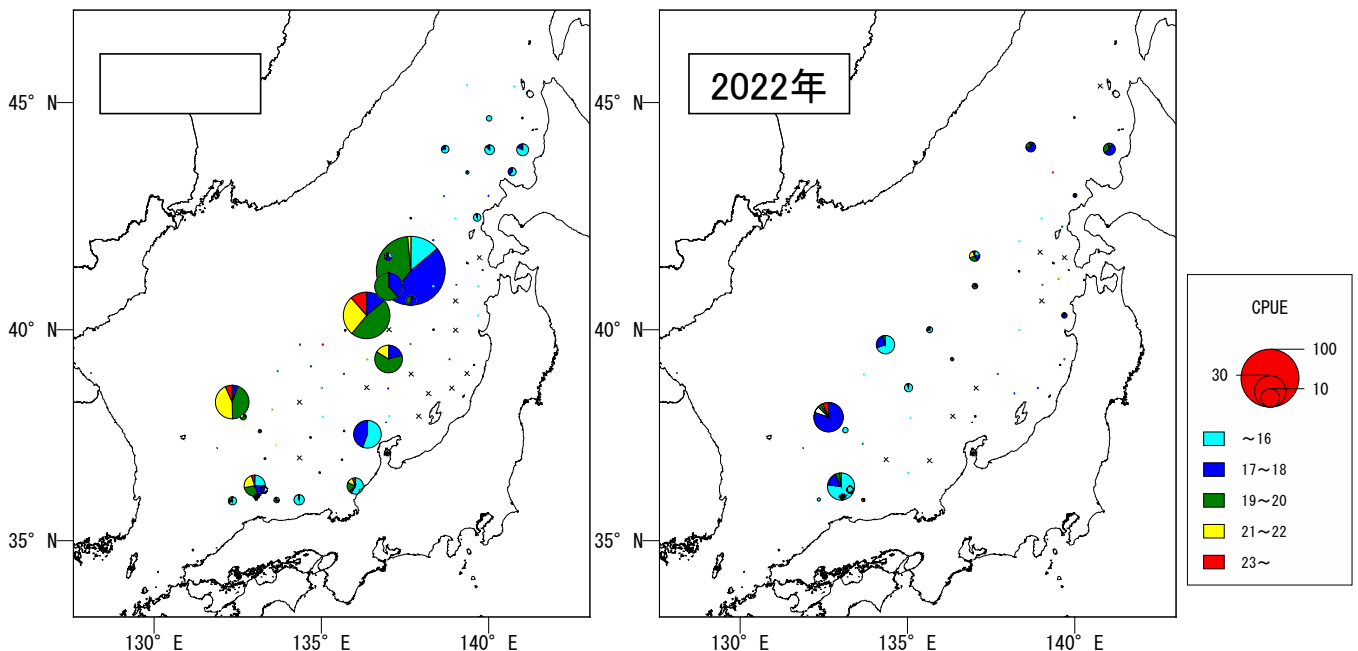


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2021年と2022年の調査結果）

図中×は漁獲がなかった点を示し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間当たりの漁獲尾数）を示す。また各色は各外套背長範囲（cm台）の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長17cm台～18cm台の個体を中心に漁獲された。一昨年以前、当該海域は本調査においてスルメイカが相対的に高密度で分布する海域であったが、前年と同様に分布量が極めて少なく、分布密度の指標となるCPUEは最大でも4.9尾で、漁獲のない点もあった。
- (2) 道南・津軽海域では、スルメイカがほとんど漁獲されず、CPUEは0.1尾以下で、漁獲のない点もあった。
- (3) 本州北部日本海では、外套背長17cm台～18cm台の個体を中心に漁獲された。CPUEは最大で1.1尾で、漁獲のない点もあった。
- (4) 西部日本海では、漁獲が多かった点で外套背長15cm台以下の比較的小さいサイズの個体が多く漁獲され、一方で20cm台以上の個体も漁獲された。CPUEは隠岐西の点の24.9尾が最大であった他は1尾を下回り、漁獲のない点もあった。
- (5) 沖合域では、漁獲が多かった点で外套背長14cm台～16cm台を中心に漁獲された。CPUEは北緯37度59分、東経132度38分の本海域で最も西の点での27.8尾が最大で、次いで北緯39度40分、東経134度20分の点の14.3尾で、漁獲のない点もあった。

今期の本調査の分布は前年と同じく、北海道西沖の分布が極めて少なかった一方で、2019年以降に見られた大和堆から外れた海域での分布密度の極めて高い点も認められなかった。調査範囲全体としては前年と同じく調査海域の縁辺部や西部日本海で比較的分布量が多いものの、漁獲が少なかった調査点、もしくは漁獲がなかった調査点が多く見られる傾向は継続していた。

2) 全調査点の平均 CPUE

本調査の全調査点の平均CPUEを日本海への来遊量の目安として示した。日本海スルメイカ漁場一斉調査の平均CPUEは、1980年代には低かったが1990年代に上昇し、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた（図2）。2003年以降は概ね15尾前後で推移していたが、近年は低下傾向にあった。2022年は2.05尾で、前年（5.43尾）および近年平均（9.84尾）を下回り、過去最低であった1986年（2.76尾）も下回った。

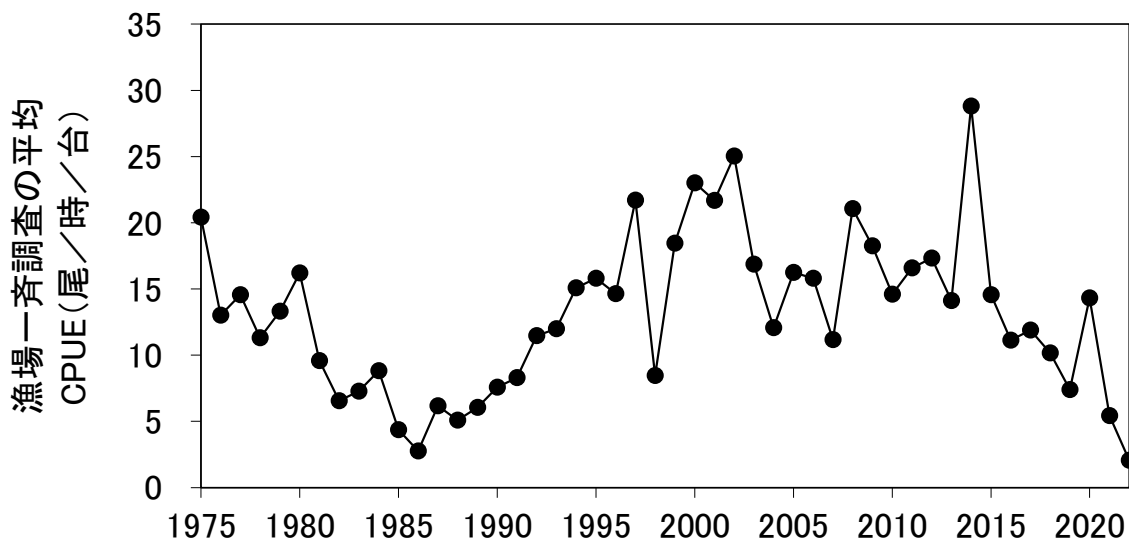


図2 日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間当たりの漁獲尾数）の推移

3) 魚体の大きさ

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUEで重み付けした外套背長組成を図3に示す。2022年は15cm台にモードが見られ、西部日本海、沖合域に分布していた。次いで17cm台～18cm台の頻度が高く、道北・道央、本州北部日本海、沖合域に分布していた。全体としては、前年および近年平均よりも小さい傾向にあった。

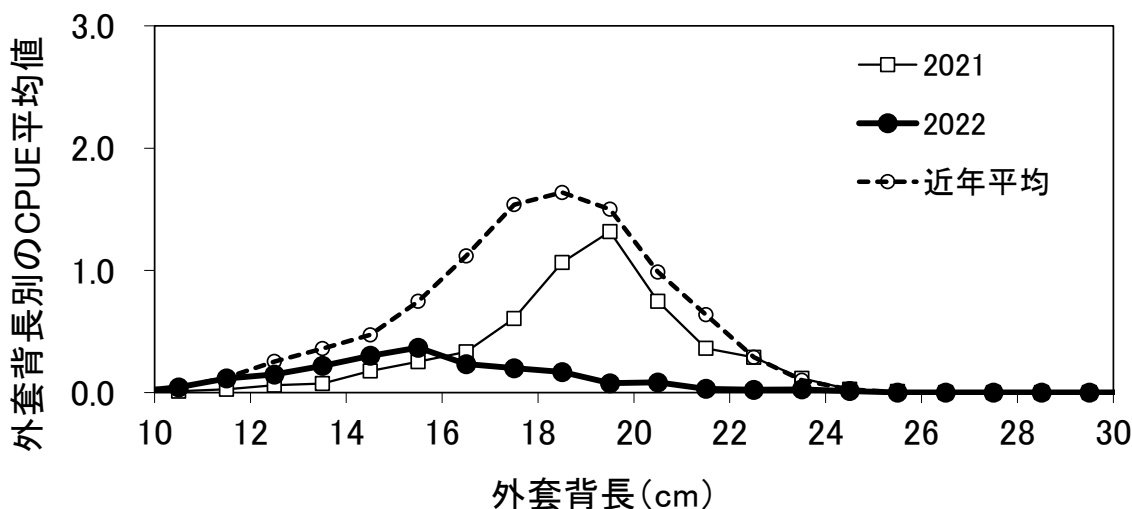


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間当たりの平均漁獲尾数を示す

2. 2022年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2022年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。道北・道央ならびに道南・津軽海域は例年漁期が開始する6月の情報が未集計である。本州北部日本海での漁獲量は、4月は前年の166%、近年平均の202%、5月～6月は前年の150%、近年平均の85%で、5月～6月は沿岸に漁場が形成された。西部日本海での漁獲量は、4月は前年の151%、近年平均の135%であったが、5月～6月は前年の70%、近年平均の98%であった。以上のように、いか釣り漁業が主体となる生鮮スルメイカの漁獲は5月～6月は本州北部日本海で前年を上回った。また、2019年以降、主に石川県以北の底びき網漁業でスルメイカの漁獲が増加傾向^{*1)}であったところ、2022年漁期も同様の傾向が見られている（詳細は未集計）。

*1) 令和3(2021)年度スルメイカ秋季発生系群の資源評価 <http://abchan.fra.go.jp/digests2021/details/202119.pdf>

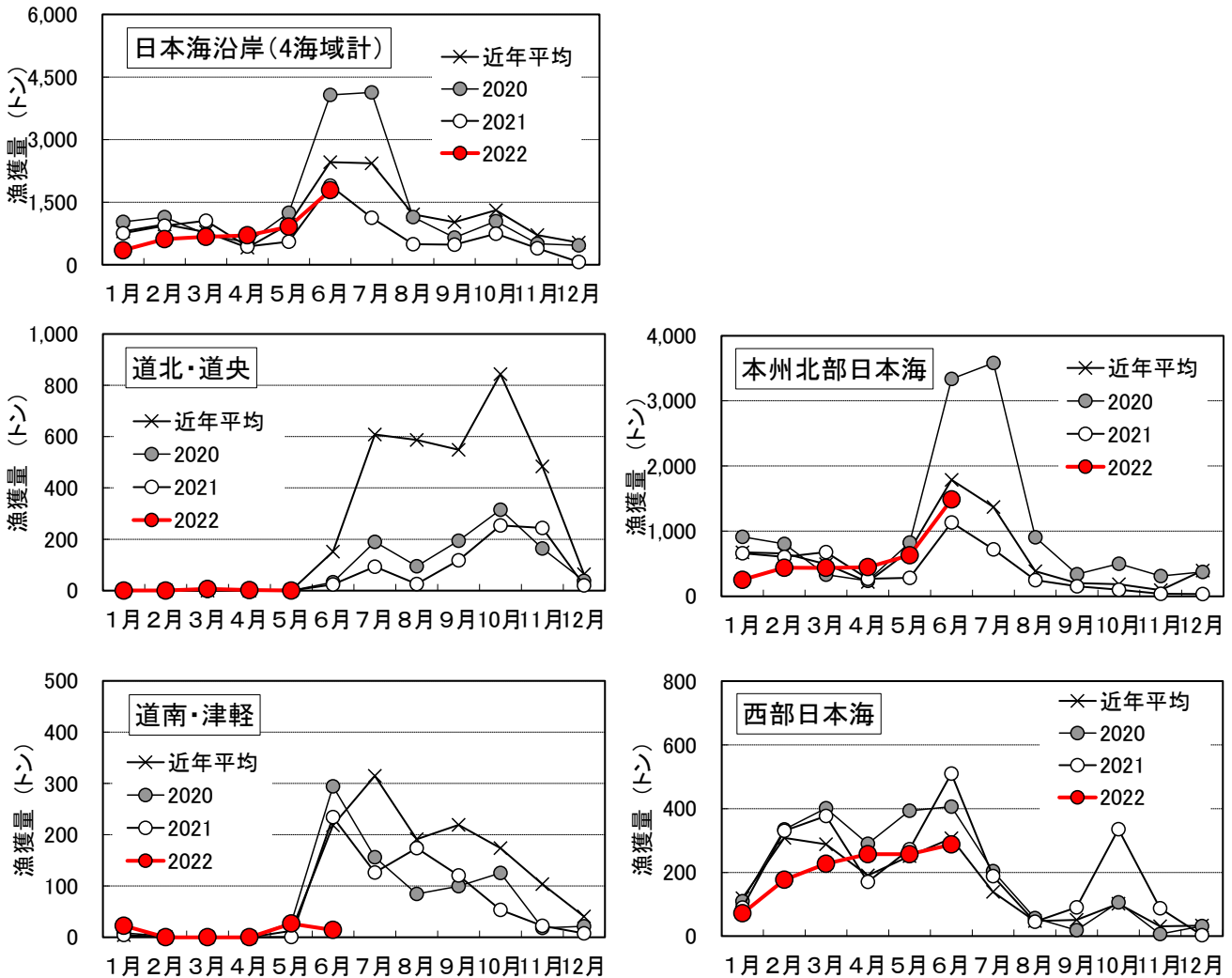


図4 日本海沿岸(4海域計) および日本海各海域の生鮮スルメイカの主要港漁獲量(速報値を含む、また日本海沿岸(4海域計)、道北・道央、道南・津軽には未集計値も含む) 各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成

3. 太平洋側(冬季発生系群)の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の漁況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

2022年度第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報(7月29日発表)では、8月～9月の太平洋側への来遊量は、道東太平洋海域で前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域で前年並と予測されている。

4. 日本海の海況予測

2022年度第2回日本海海況予報^{*2)}（7月8日発表）によれば、7月中旬～9月の対馬暖流域の表面水温は“やや高め”、対馬暖流域の50m深水温は日本海西部及び北部ともに“平年並”と予測されており、2019年以降の日本海沿岸では同様の傾向にある（日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均値）。

*2) <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2022/20220708/>

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 函館水産試験場 中央水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所